

# ベンチャーキャピタル

ベンチャーキャピタル(V.C.)が創業期のベンチャー企業への投資を一段と進めている。会社設立前の起業家に出資を決めたり、設立と同時に投資先企業に役員を派遣する例も目立つ。パソコンやオフィスを提供するV.C.も増えるなど、モノ、カネを丸抱えして有償ベンチャーを開いていく戦略だ。昨年以降設立が相次ぐV.C.が高い投資収益を狙ってベンチャー争奪戦を繰り広げている。

## 役員派遣 「助言が必要」

独立系の日本テクノロジベンチャーパートナーズ投資事業組合(東京・文京)が社外取締役を就任した。村口和孝代表は半導体関係ベンチャーのサイベック(同、村田順之社長)に出資すると同時に、村口代表が社外取締役に就任した。村口氏は最大手V.C.のシャープ出身。長年の投資経験を生かして経営指導する。

サイベックは半導体関連メーカーのO.D.を中心として、今年十月に創業したばかりで、「半導体ではベテラン企業

# V.B.投資、先手争い

## 起業前に困り込み 事業計画も点検

独立系の日本エンジェルズ・インベストメント(N.A.I.)、東京・港、井浦幸雄社長は会社設立前の起業家に絞って資金を提供する。創業時の投資に特化したV.C.は初めて。第一号としてインターネットを使って中小企業の営業や業務の効率化を手助けするイー・マーケティング(東京・大田、沢井泰二代表)に四百万円を出資した。

同社の母体となる「日本エンジェルズ・フォーラム」の会員約五百人を通じて投資先企業を発掘し育成する。投資経験豊かな個人投資家や弁護士、金融の専門家らがメンバーに名を連ねているほか、役員会の補佐役に企業経営者グループを揃えて事業計画を点検することなどで投資に見合う収益が可能と判断した。

独立系のティティファーム(東京都府中市、黒崎守峰社長)は創業期の企業を対象に投資基金(ファンド)を設立。基金の総額は十四億円。あるソフト開発の技術者には創業の最盛期

日本エンジェルズ・インベストメント株式会社  
設立披露パーティー Nippon Angels Investment



日本エンジェルズ・インベストメントは日銀出身の井浦社長(左から5人目)を中心に6月に設立した

だが、株式公開準備などはV.C.の助言が不可欠(村田社長)という。

N.T.T.ドコモなどが設立したV.C.、モバイル・インターネットキャピタル(東京・港、西岡郁夫社長)は今秋から財務や法律の専門家を紹介する事業を始め、ベンチャー支援団体の「A-1シャパン(東京・港、八幡野介会長)が抱える人材を幹部候補軍とする。

- ### 創業期企業への主な支援例
- ▽日本エンジェルズ・インベストメント 会社設立前の起業家に出資
  - ▽アイティファーム 創業期ベンチャーへの投資に絞ったファンド設立
  - ▽東京中小企業投資育成など 創業期企業に絞った20億円のファンド設立
  - ▽日本テクノロジベンチャーパートナーズ投資事業組合 出資し社外取締役に就任
  - ▽エイパックス・グロービス・パートナーズ 出資し非常勤取締役を就任
  - ▽モバイル・インターネットキャピタル 投資先を創業期企業に特定、経営幹部候補を紹介
  - ▽アイシーピー オフィス施設を割安で提供。投資先企業の非常勤取締役に就任
  - ▽東京海上キャピタルと三菱地所 東京・丸の内地区の空スペースに優遇条件で誘致
  - ▽日本アイ・ビー・エムやコンパックコンピュータなど サーバーなどを無償、割安で提供
  - ▽KDD 割安料金でインターネットを利用できるオフィス施設を提供

として本国を指増、シリコンバレーで創業させた。

アルコンピュータやコンパックコンピュータはV.C.部門を通じてベンチャーに出資するだけでなく、サーバーやソフトなどを無償か割安で提供し始めた。インターネット関連の新興企業が民物支給して支援する。

V.C.各社が創業期のベンチャーに焦点を当て始めたことで、リスクを取らないと言われてきた日本のV.C.が米国型のベンチャー育成投資に近づいてきた。

背景には三つの理由がある。まず新興企業向け株式市場が整備され、早期の株式公開による投資資金の回収が容易になった。情報技

## サーバー提供 ネット事業を一気立ち上げ

「スピードが重要なネット事業の立ち上げを一気に進めるのに役立つ」(コンパック)。創業が成功すればV.C.も増えている。

投資の手法 米に近づく

V.C.各社が創業期のベンチャーに焦点を当て始めたことで、リスクを取らないと言われてきた日本のV.C.が米国型のベンチャー育成投資に近づいてきた。

背景には三つの理由がある。まず新興企業向け株式市場が整備され、早期の株式公開による投資資金の回収が容易になった。情報技

術(IT)関連ベンチャーの設立も相次ぎ投資対象が膨らんだ。加えて、最近ではV.C.への急激な資金流入が有望ベンチャーの獲得競争を促している色彩も濃い。V.C.の乱立につれ、公開直前のベンチャーに投資しようとしても逆に選別される傾向が強まっている。例えばソフト開発のインフォテリア(東京・品川)は数十社から出資の打診を受けたが数社に絞り込んだ。

V.C.の投資採算から見ると、創業期なら一株五万円前後の額面価格で投資できるベンチャーも、公開直前だと一株百万円を超えるケースがある。高い収益を狙うにはリスクを取っても創業期の段階から投資すべきだとの認識が広がった。

ただ、V.C.側は株式公開までベンチャーを経営指導できる人材が足りないという問題を抱える。人材の育成がV.C.の緊急の課題となっている。